

着により反転が完全に不可能となった症例に対しては癒着剥離術が有用であった。

5) メッケル憩室症29例の検討

荒井 洋志・新田 幸壽 (新潟市民病院)
内藤 真一 (小児外科)

当科において1990年4月から2000年9月までに経験したメッケル憩室切除症例29例について検討した。年齢は、他疾患で開腹手術時に発見された症例を除くと7ヶ月から13歳までであった。性別は、男児22例、女児7例で、男児に多い傾向を認めた。発症原因は、腸閉塞12例(腸重積2例、軸捻転1例)、消化管出血6例、憩室炎1例で、他疾患で開腹手術時に発見された症例が10例(無症状のLittreヘルニア1例)であった。これらのうち術前診断されたのは、消化管出血6例中シンチを施行された5例のみであった。手術は、楔状切除が18例、回腸部分切除が11例であった。組織迷入は、胃粘膜が10例、膵組織が1例、胃粘膜と膵組織が2例であった。死亡症例は、横隔膜ヘルニア手術時にメッケル憩室切除を施行した1例のみであった。

6) 小児在宅静脈栄養患児におけるマンガン蓄積に関する検討

—微量元素製剤投与の面から—

飯沼 泰史・岩淵 真
内山 昌則・八木 実
金田 聡・大滝 雅博 (新潟大学)
山崎 哲・村田 大樹 (小児外科)

在宅静脈栄養 (HPN) 患児4例を対象に、市販の微量元素製剤投与の面から、これら患児におけるマンガン蓄積の問題点を検討した。その結果、4例中3例で高マンガン血症を、4例全例の頭部MRIT1強調像で、マンガン沈着を示唆する基底核の高信号領域を認めた。4例とも市販の微量元素製剤を投与されており、本剤投与によるマンガン蓄積が明らかとなった。

7) 最近経験したヒルシュスプルング病の5例

内藤万砂文・広田 雅行 (長岡赤十字病院)
小児外科

ヒルシュスプルング病の治療法は最近変化しつつある。rectosigmoid type のなかでも無神経節腸管の短い症例では経肛門的な術式が標準術式となりつつある。

total colon aganglionosis には自動吻合器を用いたMartin変法が行われるが、残す結腸は短くなる傾向にある。最近我々の経験したrectosigmoid type 2例、total colon aganglionosis 3例の治療法と経過を供覧し、ご批判を仰ぎたい。

8) 経裂孔の手術を施行した特発性食道破裂の1例

多田 哲也・小出 則彦 (立川総合病院)
蓮田 憲夫・丸山 亮 (外科)
鈴木 力 (新潟大学)
保健学科

症例は45歳男性、嘔吐後の背部痛を主訴に近医受診、CTにて下行大動脈瘤を疑われ当院心臓血管外科へ紹介、精査にて特発性食道破裂と診断され、外科転科となった。

両側胸腔ドレナージ等保存的治療にて感染症状軽快せず、入院後9日目に手術を施行した。開腹、経裂孔のアプローチにて両側胸腔内のcoagulaを除去し、縦隔から両側胸腔内にsuction drainを挿入した。食道破裂部は2層に閉じ、胃底部で被覆した。気管切開術、空腸瘻造設術も施行した。術後は著明な合併症なく経過した。全身状態不良な症例や、縦隔から両側胸腔内のドレナージを要する症例には経裂孔のアプローチが有用と思われる。

9) 壁外性発育し巨大腹腔内腫瘍で見つかったAFP産生胃癌の1切除例

吉田 徹・鈴木 全
島影 尚弘・草間 昭夫
内田 克之・岡村 直孝 (長岡赤十字病院)
若桑 隆二・田島 健三 (外科)

症例は43才女性。臍下の巨大腹腔内腫瘍にて卵巣瘍を疑われ当院婦人科を受診したが、骨盤部MRI、CTにて胃原発の腫瘍が疑われ外科受診となる。胃内視鏡では体下部体弯側に2型の腫瘍を認め、生検でgroup 5 por 2 ~ tub 2と診断された。腫瘍マーカーはAFP 42735 ng/ml, CEA 25.5 ng/ml, CA125 56.7 U/ml P IVKA II 454 mAU/mlと高値を認めた。以上より壁外発育型AFP産生胃癌の診断で手術を施行した。一部横行結腸に浸潤し、横行結腸部分切除を含む胃亜全摘術を行った。病理検査では胃壁内の腫瘍はtubular adenocarcinomaが主体だが、壁外腫瘍はYolk sac tumorが主体でAFP陽性細胞を多数認めた。現在外